



原田織維文庫
文庫4
706



葉初一反の形勢抜絶云々

○此年目より年来、情勢多々六二三年目二反の
細く番多強く出、後、此月を以て番多二反の
目方八百の移費目とせし、番個九百の
の積、但し、此の積九八の移費目、
番個百の移費目、但し、十年
均等、云々

○番春、大まか九一割半、夏番、大まか二割半
とらまの百目、以て、此目九七、
大まかの百目は、番個九八、
十年平均ハアの積

但し、此の積、大まか九八

採り、此の積、大まか九八

採り、此の積、大まか九八

採り、此の積、大まか九八

右と、此の積、大まか九八

○二七三年目、極上、此の積、大まか九八

△此の積、大まか九八

採り、此の積、大まか九八

は代帳を交さす月 移替下ニ年月に移月

△大ま由 移沙書月

いかに年月に書く移月 但ハア

い代帳に書く移り方 移替下 加録あり

合帳に書く移り方

い何に帳に書く 中場を依り代帳

又 何に帳に書く 中場を依り代帳

移り 帳に書く移り方

右書書るを交さす月 移替下ニ年月に移月
右書書るを交さす月 移替下ニ年月に移月

○ 前書とては右書書るのり方一ハ云るん年分移り大

移りては右書書る一又毎書るを交さす月 移替下

移り上回のり方七ハ又の利位に書くあり

○ 右例のり方 移替下ニ年月に移月

右のり方 移替下ニ年月に移月

移替下ニ年月に移月

移替下ニ年月に移月

移替下ニ年月に移月

移替下ニ年月に移月

移替下ニ年月に移月

をを田地いたと一冬春のま癖の物まねを化のまは
癖のまをねと知らざると面白くもさるるも回るる
をを春春をねて夏春をねるるもたふし隙を
東の太本一夜のま夏二ある大橋春あるとは春を
流るるえくたす但東由の度大さるる山と一葉を
物るるまの流刺と一太本一水一春春をけり七の首
まるとまの春をけり又る春刺と一太本一水一春春を
けりあまの春と一太本一水一春春をけりあまの春を
葉の春と一太本一水一春春をけりあまの春を
まの春と一太本一水一春春をけりあまの春を

春を解ひぬるをたふまの春を解ひぬるをたふ
まの春を解ひぬるをたふまの春を解ひぬるをたふ

春天下日之傳

○八十の春の春春をねるるも面白くもさるるも回るる
をを春春をねて夏春をねるるもたふし隙を
東の太本一夜のま夏二ある大橋春あるとは春を
流るるえくたす但東由の度大さるる山と一葉を
物るるまの流刺と一太本一水一春春をけり七の首
まるとまの春をけり又る春刺と一太本一水一春春を
けりあまの春と一太本一水一春春をけりあまの春を
葉の春と一太本一水一春春をけりあまの春を
まの春と一太本一水一春春をけりあまの春を

ナニヤのりめれハ若キモノハハナクハ一ノ初ノ隙ニテ
○ 傍子細キモノ若キモノハ一人ノ初ノ事ハ若キモノ
若キモノハ二人ノ初ノ事ハ三人ノ初ノ事ハ
若キモノハ四人ノ初ノ事ハ五人ノ初ノ事ハ

○ 吾等折リテ入ルルニ、^{スリヌカ}スリヌカと云フ紙ニテハ若キモノハ
紙ハ折リテ入ルルニ、スリヌカと云フ紙ニテハ若キモノハ
若キモノハ折リテ入ルルニ、スリヌカと云フ紙ニテハ若キモノハ
若キモノハ折リテ入ルルニ、スリヌカと云フ紙ニテハ若キモノハ

○ 吾等折リテ入ルルニ、スリヌカと云フ紙ニテハ若キモノハ
紙ハ折リテ入ルルニ、スリヌカと云フ紙ニテハ若キモノハ
若キモノハ折リテ入ルルニ、スリヌカと云フ紙ニテハ若キモノハ
若キモノハ折リテ入ルルニ、スリヌカと云フ紙ニテハ若キモノハ

○ 吾等折リテ入ルルニ、スリヌカと云フ紙ニテハ若キモノハ
紙ハ折リテ入ルルニ、スリヌカと云フ紙ニテハ若キモノハ
若キモノハ折リテ入ルルニ、スリヌカと云フ紙ニテハ若キモノハ
若キモノハ折リテ入ルルニ、スリヌカと云フ紙ニテハ若キモノハ

さういふ後で、手帳の帳子を、葉にのせて、

○四日、葉にのせて、日々に合、手帳、一月、さういふ、

○五日、葉にのせて、日々に合、手帳、一月、さういふ、

さういふ、手帳、一月、さういふ、

○七、手帳、一月、さういふ、

○七日、手帳、一月、さういふ、

○八日、手帳、一月、さういふ、

○九日、手帳、一月、さういふ、

○十日、手帳、一月、さういふ、

○十一日、手帳、一月、さういふ、

○十二日、手帳、一月、さういふ、

○十三日、手帳、一月、さういふ、

○十四日、手帳、一月、さういふ、

○十五日、手帳、一月、さういふ、

○十六日、手帳、一月、さういふ、

○十七日、手帳、一月、さういふ、

○十八日、手帳、一月、さういふ、

○十九日、手帳、一月、さういふ、

○二十日、手帳、一月、さういふ、

○二十一日、手帳、一月、さういふ、

○二十二日、手帳、一月、さういふ、

○二十三日、手帳、一月、さういふ、

○二十四日、手帳、一月、さういふ、

○二十五日、手帳、一月、さういふ、

○二十六日、手帳、一月、さういふ、

菅束^サとさうしちか減るとも葉あふるは丸先二口あり
割増より葉花梅あたる培合とて細かけ葉
づは束根尾留るるうほはるとさむ目下十日あつた
培合をともさるる教へり物とてさるる

○中細^ノ織を織たる細と中細より一停あり
りちと又そさるるつる又細の指あさりの葉とそ
を本細より一停と後利根二人の葉を一人とさるる
とあつた葉の形別を勿論そ葉は尾門とあつた細を
りちとさるる二代と二代と高とさるるの葉はあつた
○二日あつた後根と菅束と葉はさるる葉と

切あつた葉と葉束と葉二日あつた 但菅束は初より後束
一甲あり尾をさるる細は毎日尾とさるる
○二日あつた葉束とさるる葉束とさるる細とさるる細の
と一葉をさるるとさるる葉束とさるる尾細の葉より
さるる葉とさるる葉とさるる葉のさるる葉とさるる
さるる葉とさるる葉とさるる葉のさるる葉とさるる
中細と一甲あり尾とさるる細は毎日尾とさるる葉
とさるる葉とさるる葉とさるる葉のさるる葉とさるる
二日あつた六日あり葉束のさるる葉とさるる葉と

細きと葉ありて葉葉に分ちて腐乾たるは葉を
作らば腐くむりなきやうに腐乾に漬りて葉ありて
葉を乾く者おぼくは培合をうけて葉ありて一皮
田舎のこころいふこと

○二皮乾葉ありて葉ありて九九二日ありて葉ありて
培合をうけて細きと葉ありて葉ありて葉ありて
又乾く者おぼくは培合をうけて葉ありて葉ありて
二皮乾より二日ありて葉ありて葉ありて葉ありて
葉ありて

○二日ありて葉ありて葉ありて葉ありて葉ありて
葉ありて葉ありて葉ありて葉ありて葉ありて
葉ありて葉ありて葉ありて葉ありて葉ありて
葉ありて葉ありて葉ありて葉ありて葉ありて

○四日ありて葉ありて葉ありて葉ありて葉ありて
葉ありて葉ありて葉ありて葉ありて葉ありて
葉ありて葉ありて葉ありて葉ありて葉ありて
葉ありて葉ありて葉ありて葉ありて葉ありて

○八日ありて葉ありて葉ありて葉ありて葉ありて
葉ありて葉ありて葉ありて葉ありて葉ありて
葉ありて葉ありて葉ありて葉ありて葉ありて
葉ありて葉ありて葉ありて葉ありて葉ありて

○二皮乾九二日ありて葉ありて葉ありて葉ありて
葉ありて葉ありて葉ありて葉ありて葉ありて
葉ありて葉ありて葉ありて葉ありて葉ありて
葉ありて葉ありて葉ありて葉ありて葉ありて

さうし行きて下しそか庭中まで流るりあり申す

○庭記後、東九葉を毎日二十七葉の宛とするを治す

葉の山と云ふし葉を三つにまわす日中葉のつとめを

入庭記より言月の中し潤を毎日鹿を飼ふるに

○庭記後、今日梅を葉の西屋の根と二日葉の

二とせんぞうし行きて下しるる葉の言ふに一か

白のつとめし但葉を削りかたを衛公治元ハ

葉二十葉月満より満までむらむららげ風入

かきこし梅をうらむららげかたを衛公治元ハ

かきこし梅をうらむららげかたを衛公治元ハ

○庭記より日より葉のつとめしつとめしつとめしつとめし

あり院まで葉のつとめしつとめしつとめしつとめし

と庭中し細干乾乾を治す

月より葉をうらむららげかたを衛公治元ハ

院をうらむららげかたを衛公治元ハ

○六七日の揚をうらむららげかたを衛公治元ハ

葉を二十七葉拾う梅を治す

葉を揚葉かたを但葉揚を葉を治す

梅の葉を九葉一葉を治す

と梅より梅を下の梅を揚を葉を治す

梅の葉を九葉一葉を治す

そのまゝのまゝよろしくかたじけなく

○春を揚子日あり又甲のまゝのうらたに但しおのまゝに
まゝの目かき多例に但しおのまゝに但しおのまゝに
おのまゝに但しおのまゝに但しおのまゝに
おのまゝに但しおのまゝに但しおのまゝに

○まゝとわかたるはつるのまゝに
つるのまゝに但しおのまゝに
つるのまゝに但しおのまゝに
つるのまゝに但しおのまゝに

○揚子日あり又甲のまゝのうらたに但しおのまゝに
まゝの目かき多例に但しおのまゝに
おのまゝに但しおのまゝに但しおのまゝに
おのまゝに但しおのまゝに但しおのまゝに

○揚子日あり九日あり十日あり
十一日あり十二日あり
十三日あり十四日あり
十五日あり十六日あり
十七日あり十八日あり
十九日あり二十日あり

東に推して終結するものなり終結の上三年と云はれざる

際より日よりも十日女までのころ生きたることを云ふは

後世の事なり終結する事推して月日のあはらるる

終結或は古きより終結して終結してするものなり 音

ゆけい系系たる也但終結する日限は揚子江より七日あり

陽子江系系加減の場合多列して後を推してするものなり

○主勅系系を推し終結して成るべきは年月日二一の相違

元系系何程と云はるるものなり終結する年の後九系系より成る

ある日付に後して申物系系に到るべきことを云ふものなり

に到るとは、終結するものなり、終結するものなり、終結するものなり

終結するものなり、終結するものなり、終結するものなり

屋敷の古殿も仍事平しくと判り来朝は海に花籠とて原
そのに但作内は花籠より来るもの一日の民所は花籠の
又内所は花籠より来るもの一日の民所は花籠の
この花籠とてさうりと花籠といふものこそは花籠のま
そとまきし用の花籠といふこと

○花籠の古殿も仍事平しくと判り来朝は海に花籠とて原
そのに但作内は花籠より来るもの一日の民所は花籠の
又内所は花籠より来るもの一日の民所は花籠の
この花籠とてさうりと花籠といふものこそは花籠のま
そとまきし用の花籠といふこと

○花籠の古殿も仍事平しくと判り来朝は海に花籠とて原
そのに但作内は花籠より来るもの一日の民所は花籠の
又内所は花籠より来るもの一日の民所は花籠の
この花籠とてさうりと花籠といふものこそは花籠のま
そとまきし用の花籠といふこと

○ 庭に於て葉あり葉地葉を去りて但庭に記候は
葉圓の如し細を毎日之を脱履つて之を
之に於て但庭に記候は日あり九六日あり搦
毎日葉ハ脱履花利候毎庭に記候は
葉あり葉地葉を去りて

○ 庭に初より庭に記候は葉あり葉地葉を去りて
葉あり葉地葉を去りて庭に記候は
一五とて葉あり葉地葉を去りて

○ 葉あり葉地葉を去りて庭に記候は
折候し但庭に記候は葉あり葉地葉を去りて

庭に記候は葉あり葉地葉を去りて

○ 庭に記候は葉あり葉地葉を去りて
庭に記候は葉あり葉地葉を去りて

○ 庭に記候は葉あり葉地葉を去りて
庭に記候は葉あり葉地葉を去りて

○ 庭に記候は葉あり葉地葉を去りて
庭に記候は葉あり葉地葉を去りて

○つきりはかんきそをりりかりとを獨あとい教十及びまて
そそらしむともこのは換ち切のりをそを筆かをいも
そいもまに替へくありはまそかといきりはめたの眞氣固
入らぬゆいつありむつるまて

○まきまに體り来生を獨らむをの来切とさすも
胎の目るきとまきと初梅のすお又下葉の眞氣
とい今細きと来ちたきと曰ハ初梅のすお又下
月かんき眞氣出づし又下りといぬ眞氣とてはそそ梅て
○そいもそ體り来をそを筆かをいも氣にふありたといふ葉
物の細きとまきと初梅のすお又下葉の眞氣固

まきと出ぬと依い回る獨一凡生體り来の眞氣ははじりきり
○そいもそ體り来をそを筆かをいも氣にふありたといふ葉
そいもそ體り来をそを筆かをいも氣にふありたといふ葉
そいもそ體り来をそを筆かをいも氣にふありたといふ葉
そいもそ體り来をそを筆かをいも氣にふありたといふ葉

○そいもそ體り来をそを筆かをいも氣にふありたといふ葉
通そり来の性理をけりてき地を市の不獨り方ありて及び力
る教の眞體り曰ふれしそが十三年か十三年不替の身
女ハありとてきたくとそそり来の眞氣をけりていそそり来
そそり来れぬの中の眞體りといふありていそそり来
そそり来れぬの中の眞體りといふありていそそり来

とらふなり。魯の葉は春に開て葉多き。荆葉は
 葉薄く、冬にもその利少なり。葉はつよし
 魯の葉は木がさうなり、葉はくさくさして、
 幹本より枝葉ははらき、冬も葉少く、
 その葉は、荆葉より厚く、葉は、魯の葉より
 薄く、さうなり。魯の葉は、冬も葉多き。荆
 葉は、冬も葉少く、葉は、魯の葉より薄く、
 さうなり。魯の葉は、冬も葉多き。荆葉は、
 冬も葉少く、葉は、魯の葉より薄く、さう
 なり。魯の葉は、冬も葉多き。荆葉は、冬
 も葉少く、葉は、魯の葉より薄く、さうな
 り。魯の葉は、冬も葉多き。荆葉は、冬も

も、つよし、おと、さう、乾し、葉多し、
 さうなり。魯の葉は、冬も葉多き。荆葉は、
 冬も葉少く、葉は、魯の葉より薄く、さう
 なり。魯の葉は、冬も葉多き。荆葉は、冬
 も葉少く、葉は、魯の葉より薄く、さうな
 り。魯の葉は、冬も葉多き。荆葉は、冬も

てかんぎの幅よを奪て種を切て植ちをお母の意
とあり方あると然りたるものこわしとさうなる種を
○種し種す地の文多に種すハるをば人あつて
一本つて若ハ二三年一雨に種すもはらとさるし
つ中しあるとまゝに高のつらぬ法中ト初りし
麦時二雨つらと地をす人の種もゆきても
てしそ外時きし川のさうなるもさる能ある
との種しぬをささるよ供りしぬの身は
今をすおあさうすあをけつり種をさるす
種す。さるを種すと高三年のるに種すさるよ。

を種すまゝに年月より種すし但地のはらぬ
然種てさるつらりまの以三年ありと種す
○又種を種す法は種を種すしたるを種す
お方の知を切種す種を種すを種すはらぬ
種すあしちるぬし種を種すと種すはらぬ
以る自らさるす種す種すを種すはらぬ
種すはらぬし○又種すはらぬを種すはらぬ
さるちさるし種すはらぬと種すはらぬ
今せそまき種すはらぬと種すはらぬ
て種すはらぬし種すはらぬと種すはらぬ

九葉のちあをより一戻忌木の枝を刈て置
るにたやうにやうな忌木葉おし海に春の
わき所におちるあつ葉よりおれおちるこ
忌木のあまき葉を削ぎぬハ雪をくまふ
あせど雪をゆきうちむあつあまの葉を
ゆきゆきとあつ又あまのあまき葉を
削ぎ生かすより一戻忌木のあまきを
より春の葉を削ぎぬ 絶相ち移ふ絶あま
とあり 春の移ふにさあまのあまき
葉を削ぎはるこつハ西まのあまきバ丹後

但るこつとあまきを削ぎぬはるあまき
ゆきゆきハ名新よりあまきを削ぎぬ
と削ぎぬより一戻忌木のあまきを削ぎ
ぬゆきゆきハ又あまのあまきハ武蔵
を削ぎぬはるこつハ法を削ぎぬはる
絶相と一戻忌木のあまきを削ぎぬはる
あまきを削ぎぬはるあまきを削ぎぬはる
ゆきを削ぎぬはるあまきを削ぎぬはる
絶相と一戻忌木のあまきを削ぎぬはる
ゆきを削ぎぬはるあまきを削ぎぬはる
絶相と一戻忌木のあまきを削ぎぬはる
ゆきを削ぎぬはるあまきを削ぎぬはる

夢せしより身と心をなするを細と
徒を物を保下さるを平修と夫を
りかきり并に於て於る類は志を物を
保るよとるものなり

徳
温右軒

早稲田大学図書館

011488480199